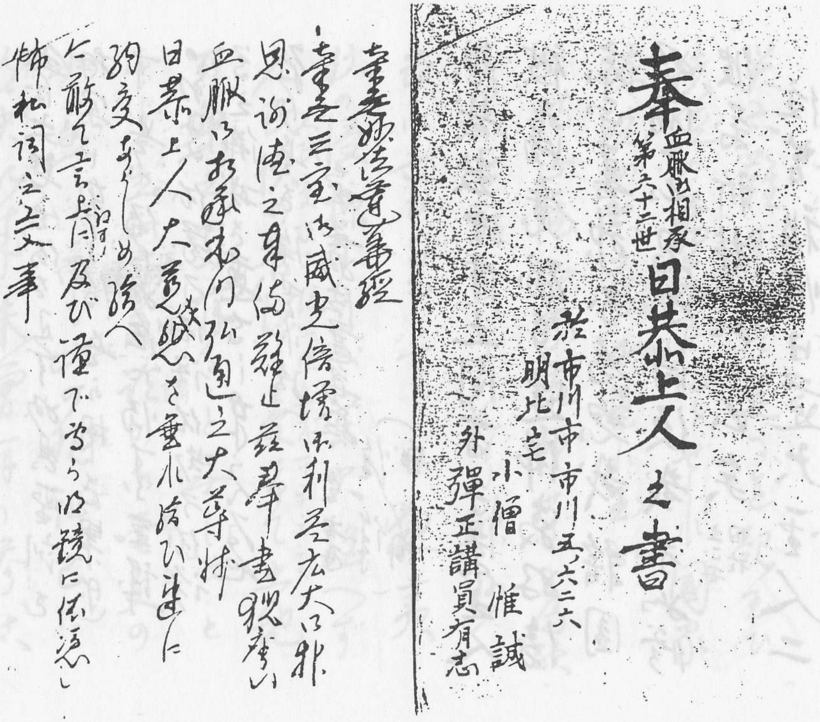


奉 血脈相承第六十二世 日恭上人之書

於市川市市川五ノ六二六
明比宅
小僧 惟誠
外弾正講員有志

南無妙法蓮華経

南無三宝御威光倍増御利益広大御報
恩謝徳之奉備難止茲奉書猊座下
血脈御相承本門弘通之大導師
日恭上人大慈大悲を垂れ給ひ速に
納受あらしめ給へ
今敢て言上致す及び謹で専ら明鏡に依憑し
怖私詞之交事

然ば文態其例を見ず妙典聖訓を
拝写し奉り後是が用を累述
す是れ偏に妙法に帰する至誠
の致處依義不依語依智不依議
等之佛戒を遵守し奉らん為也
願ば是を諒せられ給へ
南無妙法蓮華経　合掌
（惟誠 外一同）

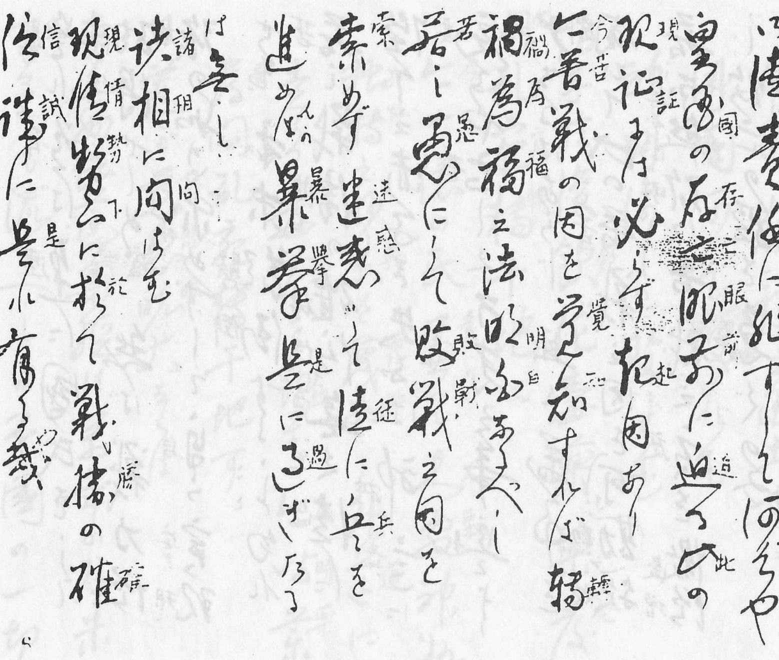
悲哉数十年之間百千萬之人
被蕩魔縁多迷佛教好傷
忘正善神不為怒哉捨国
好偏悪鬼不得便哉不如修
彼萬祈禁此一凶矣　立正安国論
往昔祖師日蓮大聖人二

然ば文態其例を見ず妙典聖訓を
拝写し奉り後是が用を累述
す是れ偏に妙法に帰する至誠
の致處依義不依語依智不依議
等之佛戒を遵守し奉らん為也
願ば是を諒せられ給へ
南無妙法蓮華経　合掌
〔惟誠 外一同〕

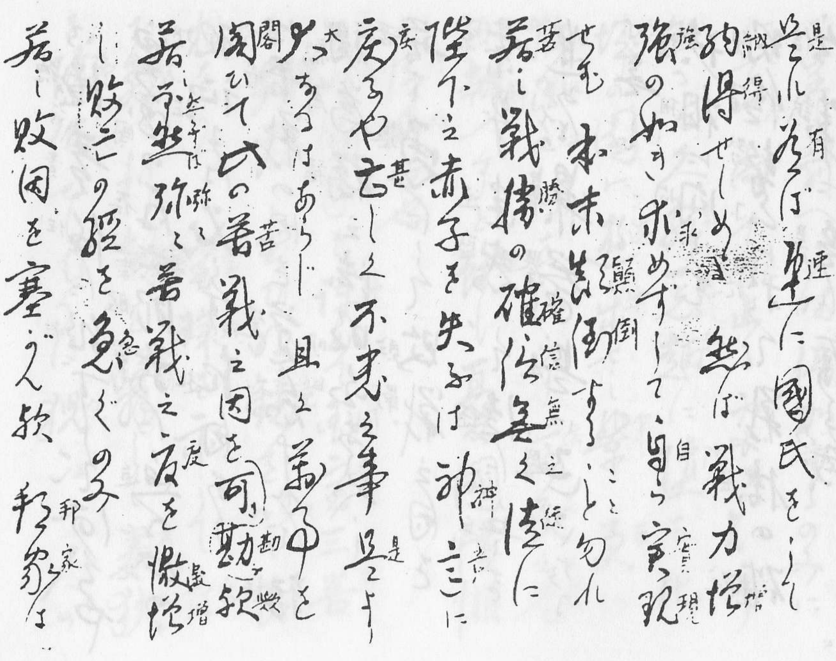
悲哉数十年之間百千萬之人
被蕩魔縁多迷佛教好傷
忘正善神不為怒哉捨国
好偏悪鬼不得便哉不如修
彼萬祈禁此一凶矣　立正安国論
往昔祖師日蓮大聖人二

災六難国土に迸るを観玉ひ
読経の要文を証とし国家
諌暁の大慈を垂れ玉ふ
今時正法正義流布せざる為歟
三災七難具に起り神妙
当に亡びなむとす　日夜夷
狄の侵掠する処業火絶へず
人民受諸苦悩土地無有可楽之處
「人民諸の苦悩を受けて土地
可楽之所有ること無し」文と
正しく立正安国論の御聖文の
如く然り而も此の現証已に
有史以来未曽有の惨状

を呈し剰へ日時倍加するのみ
而も今尚その止る處を知らず
然る間久敷悪趣に墮ち化
城の園に遊楽せし輩更に
救国之利を知らず済民之益
を辨えずと雖も憂国憤排
之情略一也
爾時国家を諌めて国寶三器
を顕示し玉ひ明鏡を以て眞
相をうつし宝珠を示して衆
に教へ利剣を翳して夷狄
を降伏せしむるは猊下一人の



御徳御責任に非ずして何ぞや
皇国の存亡眼前に迫る此の
現証には必ず起因あり
今苦戦の因を覚知すれば轉
禍為福之法明白なるべし
若し愚にして敗戦之因を
索めず迷惑して徒に兵を
進めんの暴挙是に過ぎたる
は無し
諸相に問はむ
現情勢下に於て戦勝の確
信誠に是れ有る哉



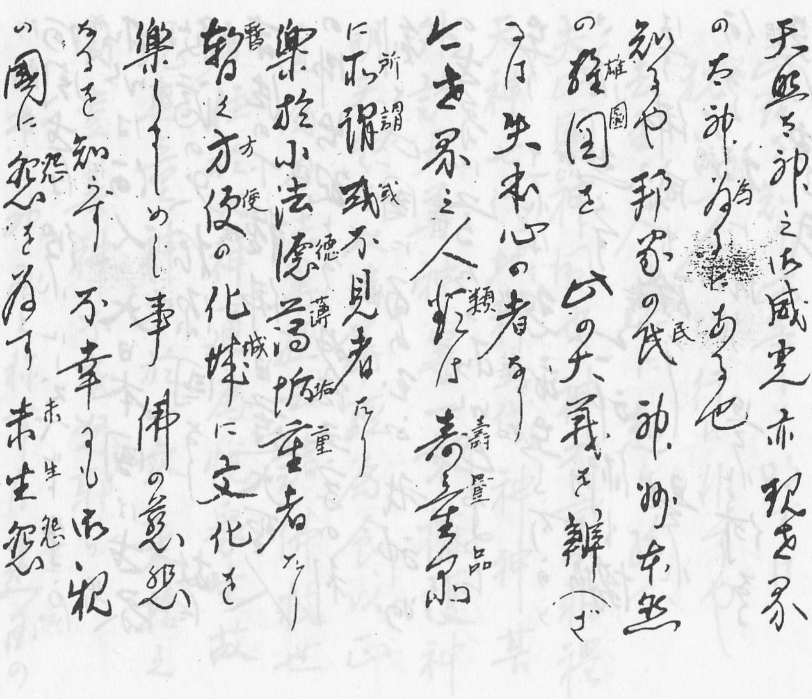
是れ有ば速に国民をして
納得せしめよ然ば戦力増
強の如き求めずして自ら實現
せむ本末顛倒すること勿れ
若し戦勝の確信無之徒に
陛下之赤子を失ふは神意に
戻るや甚しく不忠之事是より
大なるはあらじ且々萬事を
閣ひて此の苦戦之因を勘ふ可き歟
若し然らずば弥々苦戦之度を激増
し敗亡の経を急ぐのみ
若し敗因を塞がん歟　邦家は

佛神擁護之国土也
佛国何ぞ破れむ
神妙何れかの敗せむ
諸子於後飲他毒薬薬発
悶乱宛轉于地文
今一億の民兼て久敷神妙
独特之妙典を蔑如し外道に
走りて毒薬を飲む今時薬
発悶乱宛轉于地す
日蓮が慈悲眈大ならば
南無妙法蓮華経は萬年の外未
来までも流るべし日本国の一切

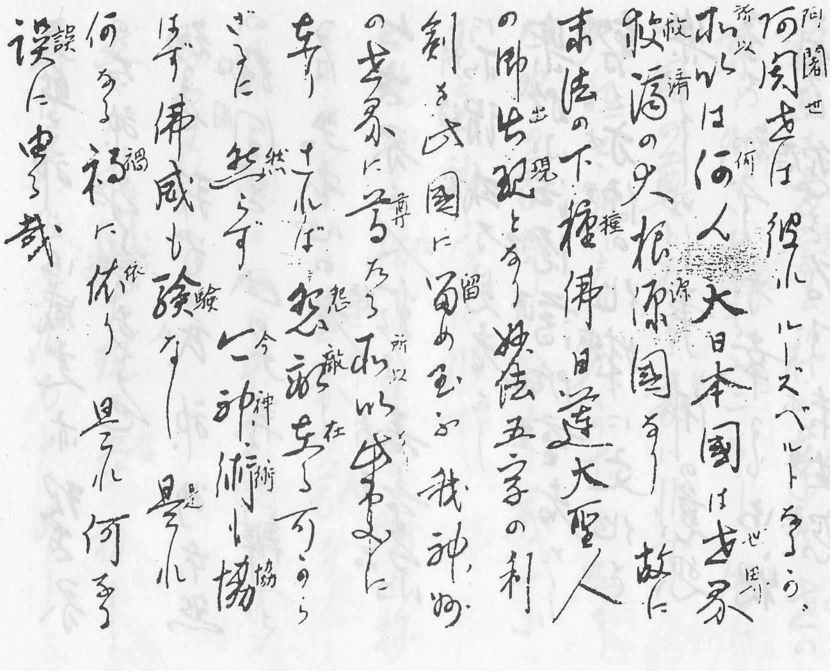
衆生の盲目を開ける功徳あり
無間地獄の道を塞きぬ云々。 報恩鈔
此の大慈大悲を一切の国民眼
を閉じ口を押へ耳を塞ぐ
されば継承し玉へる此功徳
を以て神妙一億の民の無
間地獄之道を塞ぐ大悲の大
任こそ今は唯授一人の法主
上人にあらずして外にあるべき
若し外にこれ在りとせんか
大聖人並に御開山上人の御遺
訓を妄語を為す大謗法の

輩也
右我朝神国也以敬神道為
國之勤謹討百神之本無非
諸佛之迹所謂伊勢大神宮
八幡加茂日吉春日等皆是
釋迦薬師弥陀観音等之示
現也各々ト宿習之地専調
有縁之儀云々御教書
夫れ天照太神は釈迦之示現也
宿習土地瑞穂国日本に地
をトし有縁之儀を調へ給
ひて肇国と為し玉ふと雖も

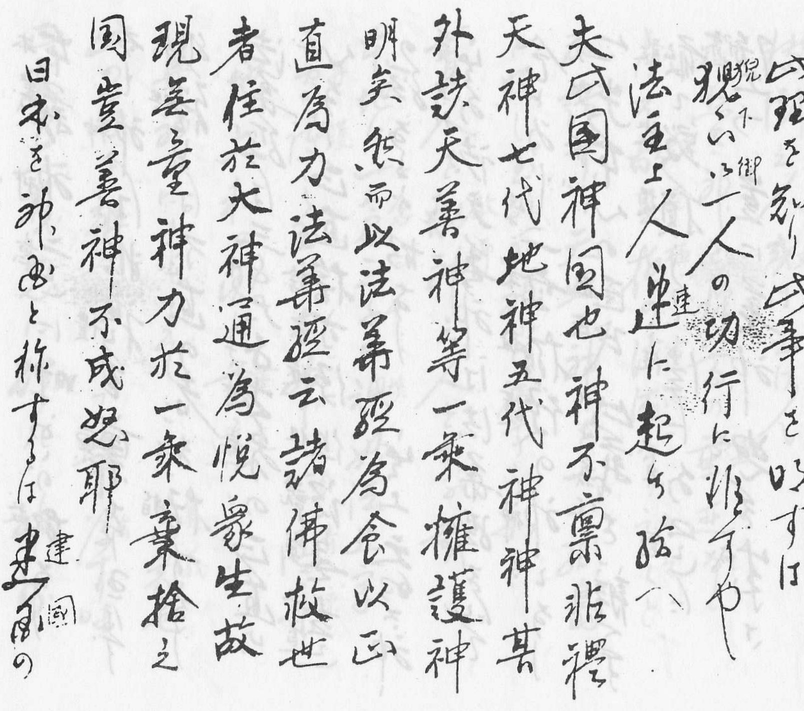
釋迦を世尊と称し奉る世の
尊と仰き奉る意なり僅に
一国の尊と為す義に非ず
天照太神とは天が下を照す
太神の義なり因より義一小
国之太神たるに非ず
今神妙を指して日ノ本ノ国と称
すとも実には世界の義なり
何れの国か日の本の国ならざる
国やある
然らば我国出現の當初より
義は天下を治むるにあり



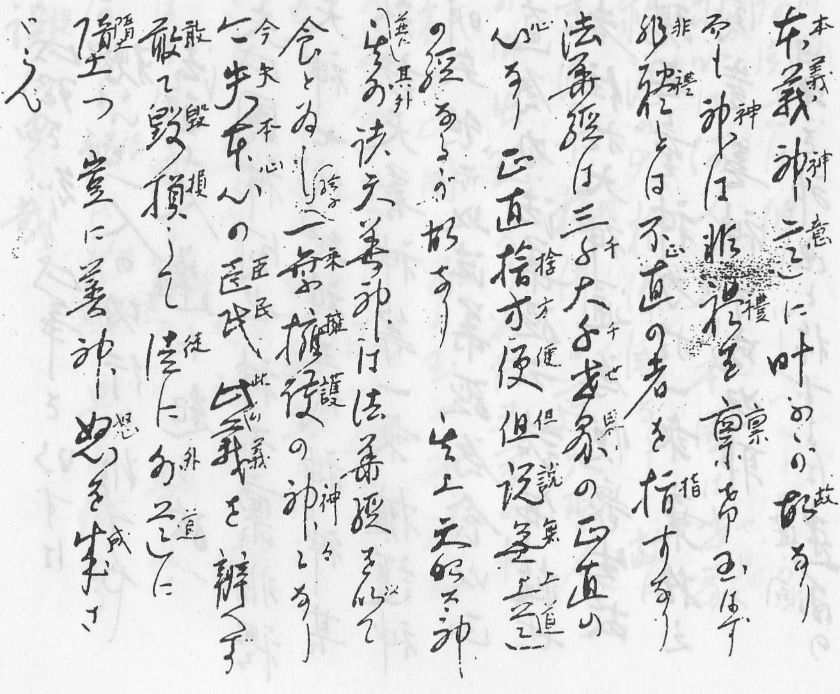
天照太神の御威光亦現世界
の太神為るにある也
知るや邦家の民神妙本然
の雄図を此の大義を辨へざ
るは失本心の者なり
今世界之人類は寿量品
に所謂或不見者たり
楽於小法徳薄垢重者たり
暫く方便の化城に文化を
楽しましめし事佛の慈悲
なるを知らず不幸にも御親
の国に怨を為す未生怨



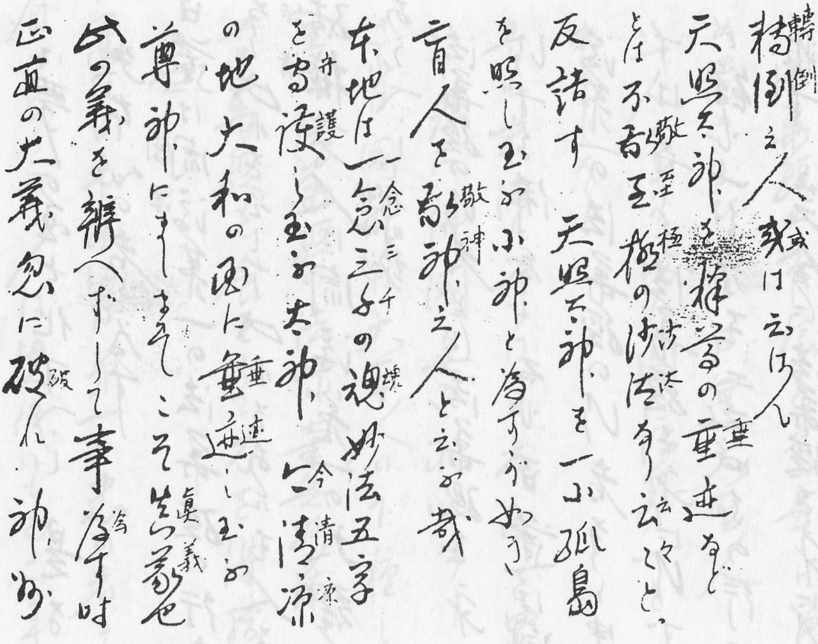
阿闍世は彼れルーズベルトなるか
所以は何ん大日本国は世界
救済の大根源国なり故に
末法の下種佛日蓮大聖人
の御出現となり妙法五字の利
剣を此国に留め玉ふ我神妙
の世界に尊たる所以なり
されば怨敵在る可から
ざるに然らず今神術も協
はず佛威も験なし是れ
何なる禍に依り是れ何なる
誤に由る哉



此の理を知り此事を明すは
猊下御一人の功行に非ずや
法主上人速に起ち給へ
夫此国神国也神不禀非禮
天神七代地神五代神神其
外諸天善神等一乗擁護神
明矣然而以法華経為食以正
直為力法華経云諸佛救世
者住於大神通為悦衆生故
現無量神力於一乗棄捨之
国豈善神不成怒耶
日本を神国と称するは建国の



本義神意に叶ふが故なり
而も神は非禮を禀け玉はず
非禮とは不正直の者を指すなり
法華経は三千大千世界の正直の
心なり正直捨方便但説無上道
の経なるが故なり　無上天照太神
並に其外諸天善神は法華経を以て
食と為し給ふ一乗擁護の神々なり
今失本心の臣民此の義を辨へず
敢て毀損して徒に外道に
堕つ豈に善神怒を成さ
ざらん



轉倒之人或は云はん
天照太神を釋尊の垂迹など
とは不敬至極の沙汰なり云々と
反詰す　天照太神を一小孤島
を照し玉ふ小神と為すが如き
盲人を敬神之人と云ふ哉
本地は一念三千の魂妙法五字
を守護し玉ふ太神　今清凉
の地大和の国に垂迹し玉ふ
尊神にましましてこそ眞義也
此の義を辨へずして事為す時
正直の大義忽に破れ　神妙

は夢の国と化すべし、是を
失本心の者と為す
日蓮は閻浮第一の法華経の行者
なり此れをそしり此れをあだむ人を
結構せん人は閻浮第一の大難に
あうべし撰時鈔

法華経の行者とは法華経を身に
行ずる佛なり而も日蓮は閻
浮第一の法華経の行者なりと申
すは等しく法華経を身に行ず
と雖も一分乃至二三四分の行に
非ず完全に法華経を身に行

じ法華経の命根を萬年に留
め置き玉ひしは日蓮大聖人
御一人なるが故に閻浮第一と
申されたり

是れ末法に入ては日本国を置
いて外に佛国無き所以なり
されば国神は大聖人の下種し
玉ふ法華経の法味南無妙法
蓮華経を食として力を得給
ふ也

日蓮は日本国には第一の忠の者なり
肩をならぶる人は先代にもあるべからず

後代にもあるべしとも覚えず御消息

嗚呼神妙守護の諸天善

神即歴代大王の力の本となる

是れに過ぎたる忠やあるべき

右等の御言皆真実にして虚

ならざる事、事証の明々白々

たるを知れば足る

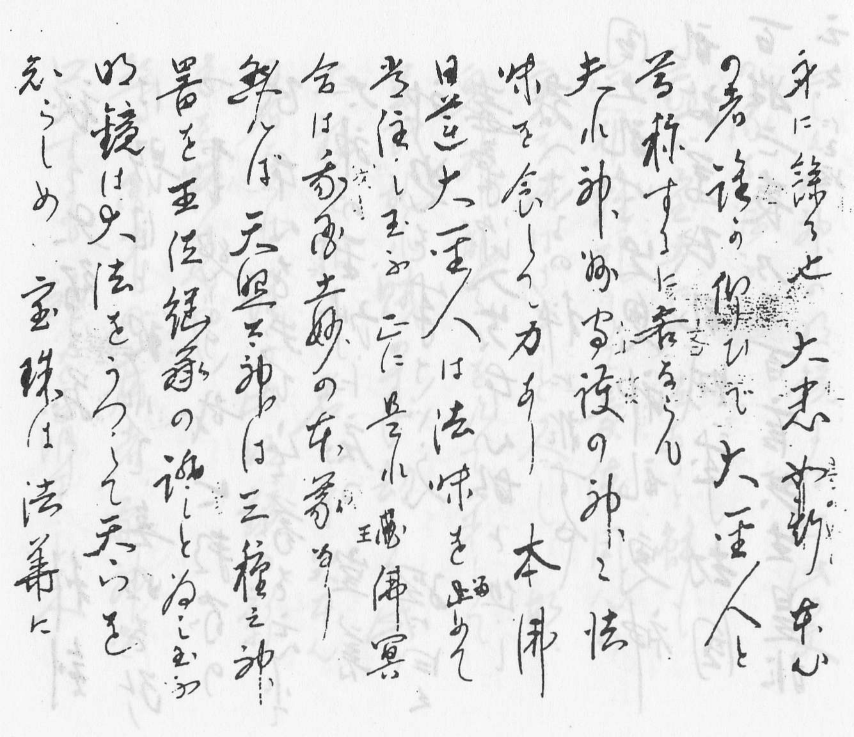
或人云はん　何ぞ自讃の大なると

大聖人曰く（※編者注「取要抄」新1071Ｐ）

喜餘身故ニ難堪自讃也と

位階勲等高く受けて喜ぶに

非ず　救国の確信ありて喜び



身に餘る也大忠是の如し本心
の者誰か仰ひで大聖人と
尊称するに吝ならん
夫れ神妙守護の神々法
味を食して力あり　本佛
日蓮大聖人は法味を留めて
常住し玉ふ正に是れ王佛冥
合は我国土妙の本義なり
然れば天照太神は三種之神
器を王位継承の証しと為し玉ふ
明鏡は大法をうつして天下を
知らしめ　宝珠は法華に

秘して大智を藏し　利剣
は題目と現れて無明を断
つ　悲しき哉今邦家の
民本心を失ひ其義を忘れて
太神の聖訓に戻る豈善
神怒を成さざらん　経に曰く
毒気深入失本心故と但し
教へざるの科に非ずや
国土乱時先鬼神乱鬼神
乱故萬民乱賊来劫国
百姓亡喪乃至百官共生是非
云々仁王経

正しく太神の明鏡には今此明文
の像を浮ぶ
我が宝土に大法ありと雖も
正邪雑乱して異体同心の
実を結ばざること久し　故に
鬼神乱るるを以て果して
萬民乱れ賊の来劫して此の
大福を招く　若し不失本心
の者ならば誰が此明鏡の影
像を疑はんや
然るに国中の病者敬神を
口にするも神を潰すこと久し

其の證繁多にして挙ぐるに
遑なし今根本を述べて
懺悔の心を誘はむ
抑も神を祭るに自ら其の
資格ありや且つ其の道を知
れるや　神は正直を以て
棲となし玉ふ正直とは正義に
直なる心なり経に所謂
質直意柔輭一心欲見佛
の者ならざるべからず所以は
佛とは正義を魂とせる教主な
ればなり

其の證繁多にして挙ぐるに
遑なし今根本を述べて
懺悔の心を誘はむ
抑も神を祭るに自ら其の
資格ありや且つ其の道を知
れるや　神は正直を以て
棲となし玉ふ正直とは正義に
直なる心なり経に所謂
質直意柔輭一心欲見佛
の者ならざるべからず所以は
佛とは正義を魂とせる教主な
ればなり

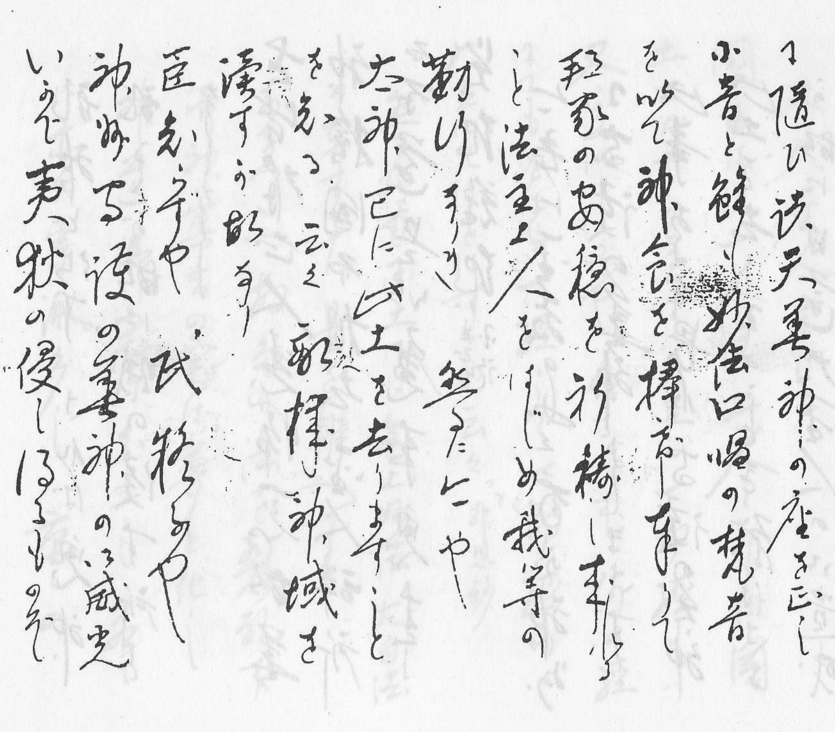
我が天照太神は正義を世
尊と等ふし無上道を以て
正直と為し玉ふ故に天壊
と共に無窮なるべしと詔し
玉ひしなり佛身の金剛不壊なる
に等し此無上道に依憑する
ことなく国神を祭るはそもそも
祭儀乱るるの本と云ふべし
而も無上道は唯一乗のみ二
又三あるべからず経に云く
如来但以一佛乗故為衆生
説法無有餘乗若二若三と

又大聖人言同之
国主は但一人なり二人となれば国
土おだやかならず乃至一切経も
又かくのごとくや有るらむ何の経
にてもをはせ一経こそ一切経の
大王にてはをすらめ云々。報恩鈔
然るに我国土には無上妙法大白法
の在するに是を辨へず
あまつさへ数多の法を雑乱す
佛神冥合の実は夢と化し
神道佛教は分立し　各々
に亦た宗派多し　重々の

又大聖人言同之
国主は但一人なり二人となれば国
土おだやかならず乃至一切経も
又かくのごとくや有るらむ何の経
にてもをはせ一経こそ一切経の
大王にてはをすらめ云々。報恩鈔
然るに我国土には無上妙法大白法
の在するに是を辨へず
あまつさへ数多の法を雑乱す
佛神冥合の実は夢と化し
神道佛教は分立し　各々
に亦た宗派多し　重々の

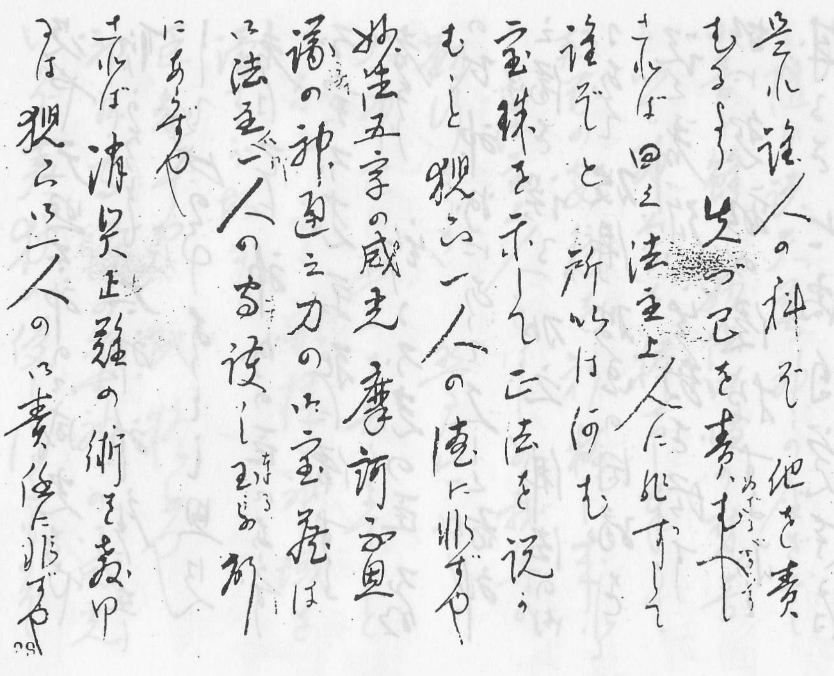
乱神と化す　されば鬼神
乱るるが故に賊の侵す所と
なりしなり
世皆背正人悉帰悪故善
神捨国而相去聖人辞所
而不還是以魔来鬼来
災起難起　立正安国論
今当に聖教の如く我が神妙
の守護の善神ましまさず
此事あるを畏れ守護の太神
此土を去り玉ふことを願はざる
が故に日蓮大聖人の御遺戒

乱神と化す　されば鬼神
乱るるが故に賊の侵す所と
なりしなり
世皆背正人悉帰悪故善
神捨国而相去聖人辞所
而不還是以魔来鬼来
災起難起　立正安国論
今当に聖教の如く我が神妙
の守護の善神ましまさず
此事あるを畏れ守護の太神
此土を去り玉ふことを願はざる
が故に日蓮大聖人の御遺戒

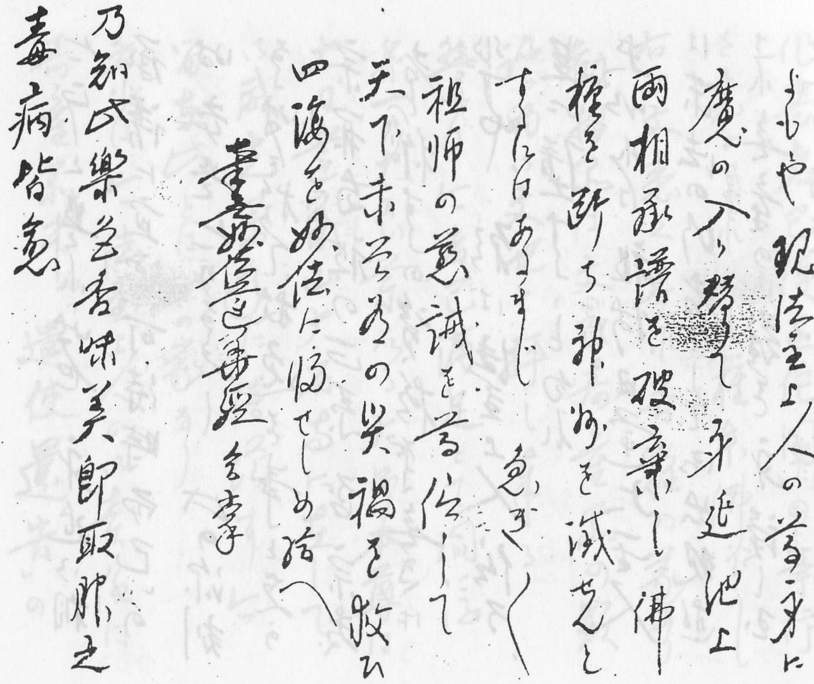


に隋ひ諸天善神の座を正し
小音と雖も妙法口唱の梵音
を以て神食を捧げ奉りて
邦家の安穏を祈祷し来れる
こと法主上人をはじめ我等の
勤行なりき　然るに今や
太神已に此土を去りますこと
を知る、云々敵機神域を
潰すが故なり
臣知らずや　民疑ふや
神妙守護の善神の御威光
いかで夷狄の侵し得るものぞ

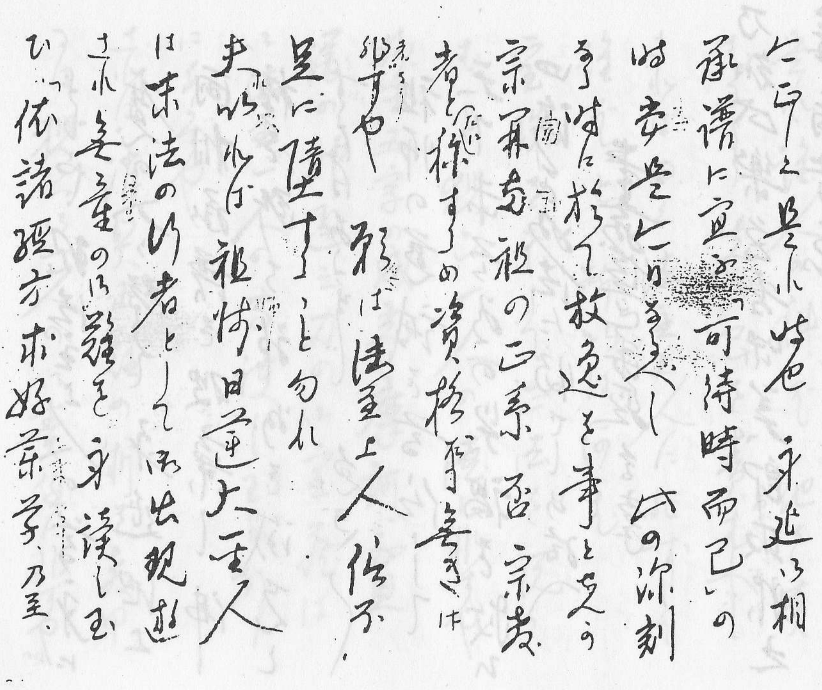
況や天照太神の御威光をや
聊かたりとも太神神座に在し
まして而も此の事ありとや思はん
者は已に神妙の臣にあらず
不実不忠萬死に價する
者なり　斯る不忠の臣不明
の民神妙にあって久しく敬神
之儀を誤る　加之佛法の内
にあって破佛破国の因縁を
説く者弥々其数を増す
故に怨敵の侵掠する所と
成るを今尚自覚せざるは



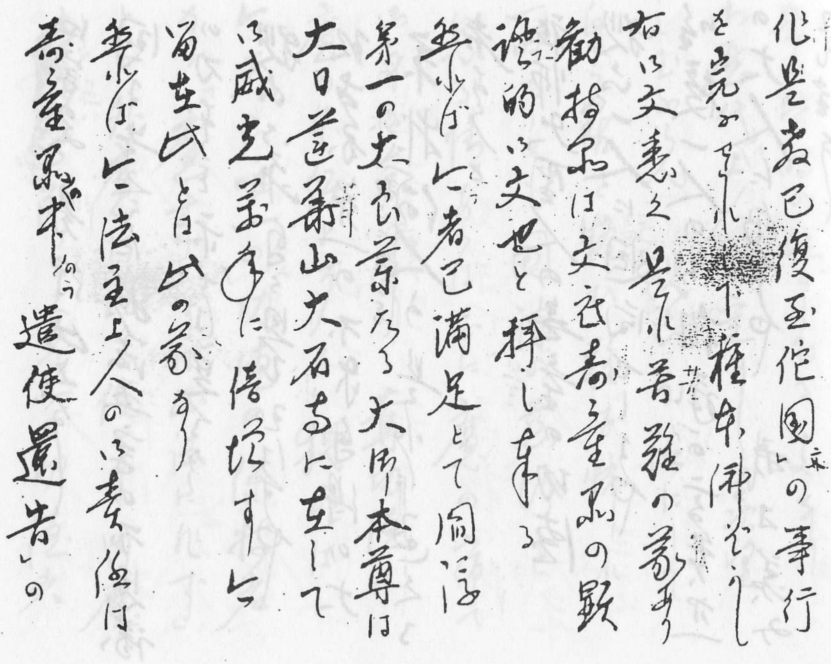
是れ誰人の科ぞ　他を責
むるより先づ己を責めざるべからず
されば問って法主上人に非ずして
誰ぞと所以は何む
宝珠を示して正法を説か
むこと猊下一人の徳に非ずや
妙法五字の威光摩訶不思
議の神通之力の御宝蔵は
御法主御一人の守護し玉ふ所
にあらずや
されば消災止難の術を教ゆ
るは猊下御一人の御責任に非ずや


よもや現法主上人の尊身に
魔の入り替りて身延池上
両相承譜を破棄し佛
種を断ち神妙を滅せんと
するにはあるまじ 急ぎ急ぎ
祖師の慈誡を尊信して
天下未曽有の災禍を救ひ
四海を妙法に帰せしめ給へ
南無妙法蓮華経合掌
乃知比薬色香味美即取服之
毒病皆愈

よもや現法主上人の尊身に
魔の入り替りて身延池上
両相承譜を破棄し佛
種を断ち神妙を滅せんと
するにはあるまじ　急ぎ急ぎ
祖師の慈誡を尊信して
天下未曽有の災禍を救ひ
四海を妙法に帰せしめ給へ
　南無妙法蓮華経合掌
乃知比薬色香味美即取服之
毒病皆愈



今正しく是れ時也身延御相
承譜に宣ぶ「可待時而已」の
時当是今日なるべし民の深刻
なる時に於て放逸を事とせんか
宗開両祖の正系否宗教
者とだに称する資格無き
者なり　願くば法主上人信不
足に堕すること勿れ
夫れ以れば祖師日蓮大聖人
は末法の行者として御出現遊
され無量の御難を身讀し玉
ひ「依諸経方求好薬草乃至



作是教已復至佗国」の事行
を完ふせられし下種本佛ぞかし
右御文悉く是れ苦難の義あり
勧持品は文底寿量品の顕
證的御文也と拝し奉る
然れば今者已満足とし閻浮
第一の大良薬たる大御本尊は
大日蓮華山大石寺に在して
御威光萬年に倍増す今
留在此とは此の義なり
然れば今法主上人の御責任は
寿量品の中の「遣使還告」の

四字のみ易行此上もなし
国に告ぐるに妙法五字の不思議
の力ありと示せば足るなり
猊下御身自ら思ひ玉はずや
現世界第一の不求自得の大
果報猊下に及ぶ者何人か是れ
あらんと
祖師大聖人の無量の功徳
猊下御一人に廻向せしにや
唯受一人の御相承たる高貴第一
の大人に非ずや　我等羨み
ても詮なし

是れ皆時の然らしむる處なり
御歴代御上人等定めし羨望
し玉ふらん猊下不信にして
自ら智を疑ひ難を怖れ
一時たりとも国諌の慈行を
怠る情あらば正に魔の宿りて
御身を食ふなるべし奪功徳は
魔の本領と聞く猊下は
今天下唯一の功徳の保持者
なり「魔来らずば正法に非ず」
とか外魔は論を俟たず内魔
晝夜間断なく第一の功徳は

御法主上人の御身を窺ふ
或は魔は正宗僧侶に扮し
法主上人に忠勤なるが如くして
今側近に在り 彼の魔
侶の云く 今の時上に対し奉り
諫暁など以ての外なり
斯くては我宗門は国権に依て
削除され宗門の破滅必定
ならんと 彼等の意中三悪
趣に起因する為身為宗門の
念魔の外為国為法の慈
悲更に之れ無し三世常

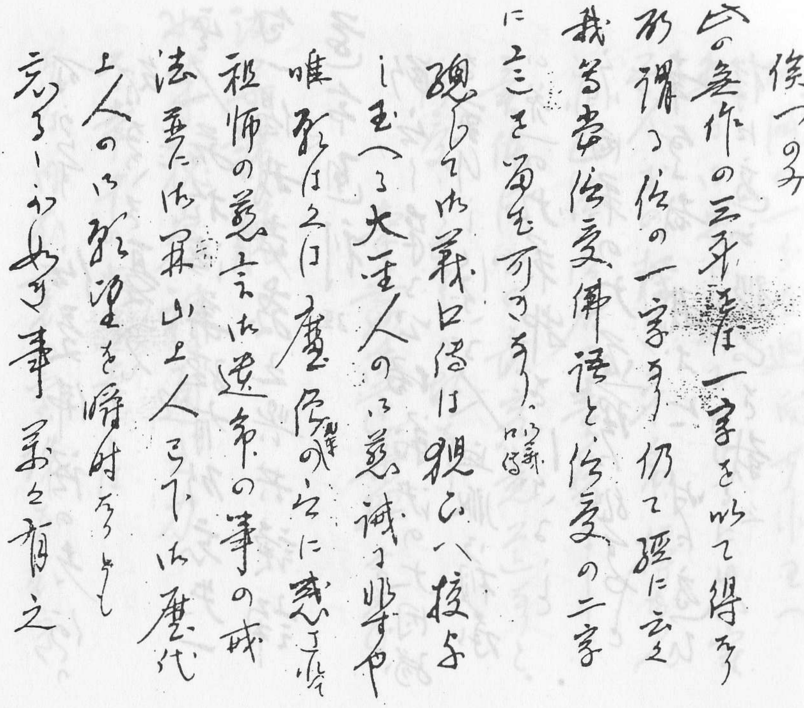
住事の法門を辨へざる魔
族なり法衣を着する資格
なし　大恩祖師日蓮大聖人
常に言く「全為身不申之
為神為君為国為一切
衆生云々」と
夫れ大恩宗祖が血を以て遺
され玉ひし教を心肝に染めず
出家の形をなすとも露の身の欲
心を最大一と念じ故に為身
為宗を是れ事とし眼前
の安逸を願ふて国権を

怖れ亡国の因縁を知って而も
諫暁せず不知恩の者なり
国土に住する謂れ無し
法主の家人に非ず 法衣を
纒ふ盗人と云ふべし魔事魔
行に非ずして何ぞ

此輩閻浮第一の御本尊の
御威光を被ふ黒雲なり且つ
猊下の大功徳行の行方を防
ぐ大旋風なり 速に排除せ
ざれば御身の失とならん夢々
御油断有之可からず

無智を以て法華経の機と定
めたり（御義口伝）
日蓮正宗上位の魔僧云く
現下の情勢広宣流布の時
なるかの如く伺はるるも現法主
日恭上人は国家諌暁の器に
非ず所以は智恵不足の故に
公場対決の任に堪へずと
此の言慢と云はん乎癡と云
はん乎
反詰せん今時所謂智僧
本宗内に有りとするも此智

大聖人と比して物の数に入る哉
況んや邪宗の智に於てをや
而も小智否邪智に依憑せん
か最も危きことなり　経に
云はずや随順此経非己智分と
亦た曰く以信得入と或は曰く
信受と是等の佛語は皆無
智を以て法華経の機と定むるが
故なり自ら智ありと誤り悟るは
上慢なり智者学匠と為て堕
地獄者也我等猊下の智を
憑むに非ず只信行の事を



侯つのみ

此の無作の三身をば一字を以て得たり

所謂る信の一字なり仍て経に云く

我等当信受佛語と信受の二字

に意を留む可きなり。御義口伝

総じて御義口伝は猊下へ授与

し玉へる大聖人の御慈誡に非ずや

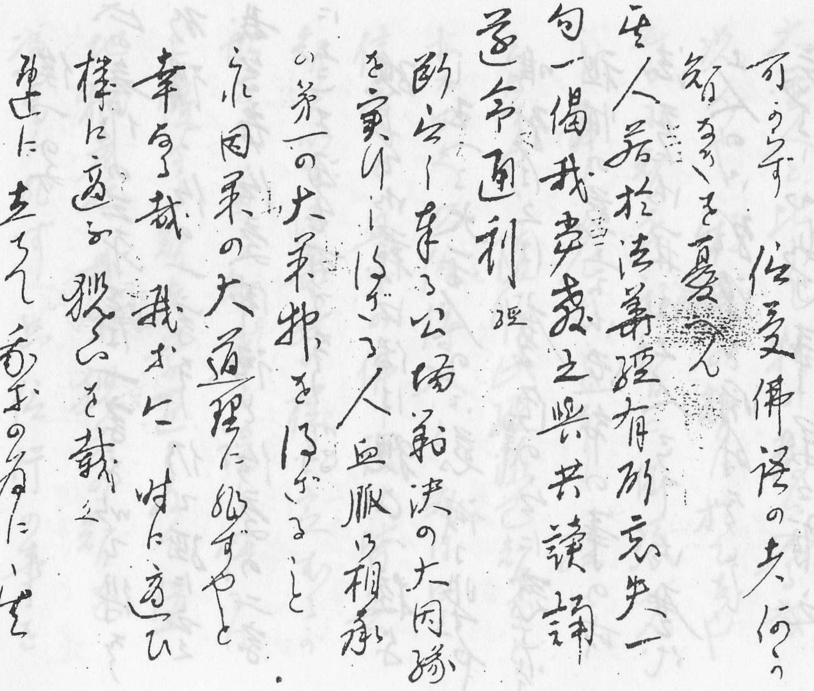
願はくは魔僧等の言に惑されて

祖師の慈言御遺命の事の戒

法並に御開山上人已下御歴代

上人の御願望を瞬時たりとも

忘るるが如き事萬々有之



可からず　信受佛語の者何か
智なきを憂へん
其人若於法華経有所忘失一
句一偈我当教之與共讀誦
還令通利経
断言し奉る公場対決の大因縁
を実行し得ざる人血脈御相承
の第一の大果報を得ざること
これ因果の大道理に非ずやと
幸なる哉我等今時に適ひ
機に適う猊下を載く
速に立ちて我等の為に其

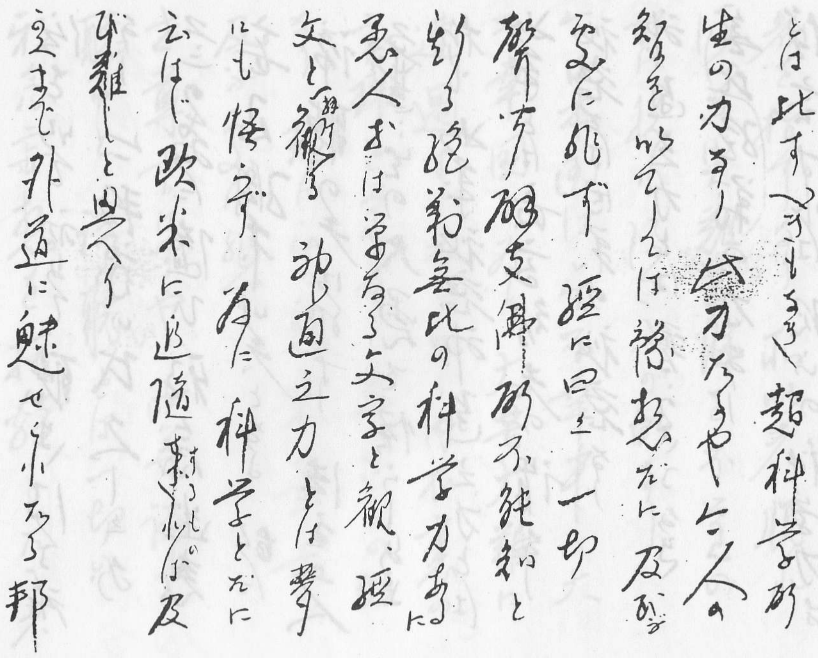
功徳の一分を廻向せられ玉へ
然らば御恩に報ひ奉るに真実
吾等の軽き身命捧げん
これ正法信者の責務にして
異体同心の最究意道なりと
信受し奉るが故なり
南無妙法蓮華経合掌

汝等諦聴
如来秘密神通之力
不幸中の大不幸とは
それは内衣裏の宝珠を知らざ

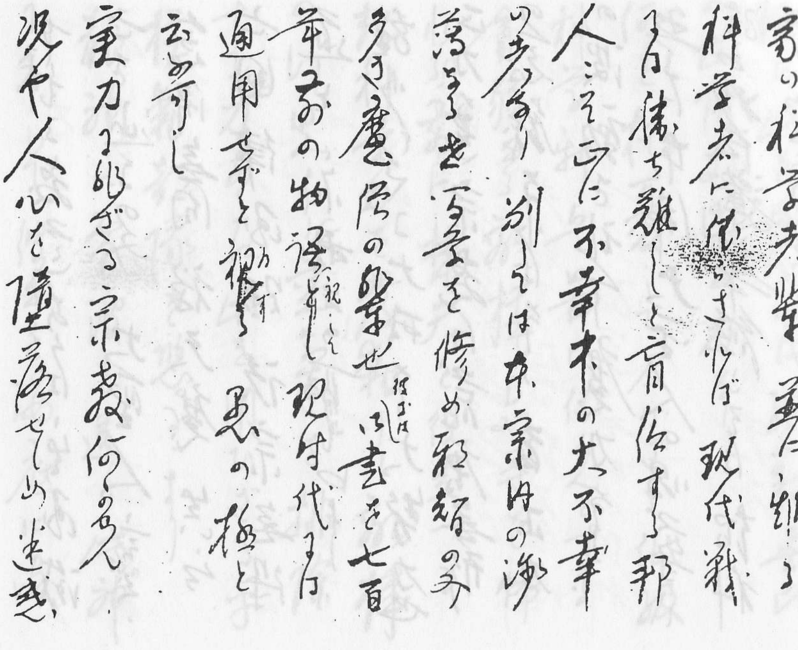
者を指すなり所以者脱れ
得べき災難苦悩を不覚の
故に脱れ得ざるが故なり
今日本国は其不幸中の大
不幸国と為り大苦大難に
遭遇す而も自ら内衣裏の
宝珠を覚らず教へざるの故
なり現に其悲哀筆舌の
及ぶ処に非ず
世尊言はずや汝等諦に
聴けと諦聴とは一切の
邪念妄想を捨離したる者

信を以て初めて聴き得る所なり今邦家の民久しく外道の教に随ひ邪念迷惑妄見網中の者となる故に諦聴の者に非ず　法主上人疾く其の大愚を悟らしめよ抑も如来秘密神通之力とは如来とは最高智者の謂なり秘密とは因果の秘密なり神通之力とは普かざるなき無比絶対の力なり換言すれば現下の科学力等

信を以て初めて聴き得る所
なり今邦家の民久しく外
道の教に随ひ邪念迷惑
妄見網中の者となる故に
諦聴の者に非ず　法主上人
疾く其の大愚を悟らしめよ
抑も如来秘密神通之力とは
如来とは最高智者の謂なり
秘密とは因果の秘密なり
神通之力とは普かざるなき
無比絶対の力なり
換言すれば現下の科学力等



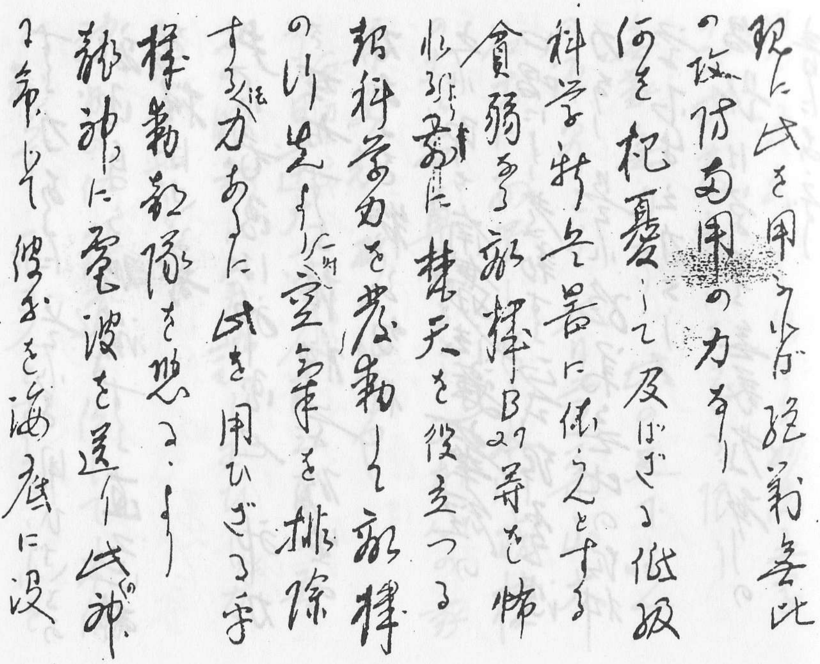
とは比すべきもなき超科学所
生の力なり此力たるや今人の
智を以てしては豫想だに及ぶ
處に非ず 経に曰く 一切
聲聞辟支佛所不能知と
斯る絶対無比の科学力あるに
愚人等は単なる文字と観、経
文と拝す 神通之力とは夢
にも悟らず 為に科学とだに
云はじ欧米に追随するもの
と思へり
かくまで外道に魅せられたる邦



家の科学者輩　並に斯る
科学者に依らざれば現代戦
には勝ち難しと盲信する邦
人こそ正に不幸中の大不幸
の者なり　別しては本宗内の浅
薄なる世間学を修め邪智のみ
多き魔僧の輩也彼等は御書を七百
年前の物語視して現時代には
通用せずと為す　愚の極と
云ふ可し
実力に非ざる宗教何かせん
況や人心を墜落せしめ迷惑

する教道あらば其国滅
亡を辿るのみ　大聖人言はく
念佛無間禅天魔真言
亡国律国賊諸宗無得
道とこれ我等の常に口より
離れ得ざる大戒なり大勢力也
正力なき宗教は荒唐無形
の悪戯なればなり否正力
の波動を乱す魔力なり
然るに本佛大聖人の唱導し
給ふ妙法蓮華経こそは超科
学所生の実力なり

する教道あらば其国滅
亡を辿るのみ　大聖人言はく
念佛無間禅天魔真言
亡国律国賊諸宗無得
道とこれ我等の常に口より
離れ得ざる大戒なり大勢力也
正力なき宗教は荒唐無形
の悪戯なればなり否正力
の波動を乱す魔力なり
然るに本佛大聖人の唱導し
給ふ妙法蓮華経こそは超科
学所生の実力なり



現に此を用ふれば絶対無比
の攻防両用の力なり
何を杞憂して及ばざる低級
科学新兵器に依らんとする
貧弱なる敵機Ｂ29等を怖
れるより梵天を役立つる
超科学力を発動して敵機
の行先より一時空気を排除
する法力あるに此を用ひざる乎
機動部隊を恐るゝより
龍神に電波を送り此の神
に命じて彼等を海底に没

する神力あるに是れを用ひざるか
敵国自ら破滅する直道あるに
是を撰ばざる乎
夫れ我国は神国也　神力
を左右する超科学所生の
力あるを疑ふ勿れ
之れ即ち南無妙法蓮華経の
口唱により発動する正式超電波
力なり是れ絶対無比の超科
学所生之力なり
唱題は単なる無義発聲の
音にあらず

する神力あるに是れを用ひざるか
敵国自ら破滅する直道あるに
是を撰ばざる乎
夫れ我国は神国也　神力
を左右する超科学所生の
力あるを疑ふ勿れ
之れ即ち南無妙法蓮華経の
口唱により発動する正式超電波
力なり是れ絶対無比の超科
学所生之力なり
唱題は単なる無義発聲の
音にあらず

従て源泉より出ずる妙法五字
の正式発動にあらざる限り
無義無力なり　此の天下唯一
の源泉こそ大日蓮華山大
石寺に安置し奉る本門戒檀
の大御本尊なること正本心の我
等のみ知る所に非ずや
而も此の力たるや日蓮大聖人御自ら再三再四吾
等の眼前に実證し玉ひし法力
なり
神妙の仁外道を信じて本佛
を知らず　示さんとするにこれを

従て源泉より出ずる妙法五字
の正式発動にあらざる限り
無義無力なり　此の天下唯一
の源泉こそ大日蓮華山大
石寺に安置し奉る本門戒檀
の大御本尊なること正本心の我
等のみ知る所に非ずや
而も此の力たるや日蓮大聖人御自ら再三再四吾
等の眼前に実證し玉ひし法力
なり
神妙の仁外道を信じて本佛
を知らず　示さんとするにこれを

疑ふ故に此の大愚今日の
不幸を生来す而も尚ほ
悟らず　宰官は暗愚に
して民を救はず諸将は狂
暴にして亡国を急ぐ此時
法主居まさずば帝国は
天照太神を初め諸天善神の
捨離し玉ふ処とならん　此に
過ぎたる危機やあるべき
幸なる哉　日蓮大聖人
我日本の柱とならん
我日本の眼目とならん

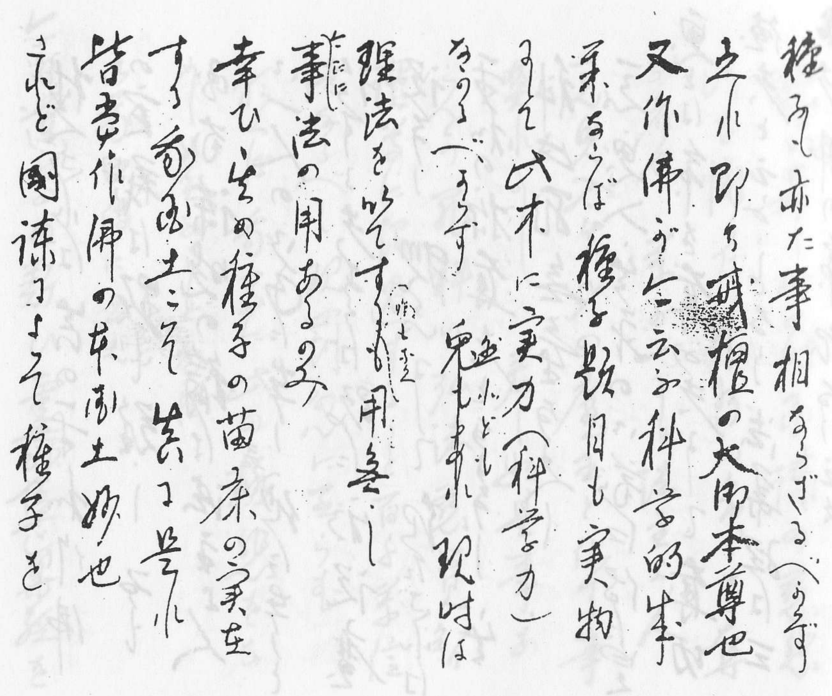
我日本の大船とならん
との大誓願と共に其実力の
源泉たる事の三大秘法
を末法萬年の為に此国に
留め玉ひ今法主上人此力
の源泉を相承し玉へば不
安更に無し

悦しき哉我等如何なる前世
の宿習にや已に我等我
眷族は妙法五字の力にて安
泰そのもの也
唯悲しむ可きは現下未

曽有の惨事を見んこと
のみ速に此悲事を滅除
し玉へ
南無妙法蓮華経　合掌
皆当作佛の四字は南無妙法蓮華経
の種子に依るなり御義口伝
要言すれば皆当作佛こそ真
の平和の義なり　而も此の平
和は題目の種子に依る外無し
と定まる　作佛が事相なれば

曽有の惨事を見んこと
のみ速に此悲事を滅除
し玉へ
南無妙法蓮華経　合掌

皆当作佛の四字は南無妙法蓮華経
の種子に依るなり御義口伝
要言すれば皆当作佛こそ真
の平和の義なり　而も此の平
和は題目の種子に依る外無し
と定まる　作佛が事相なれば



種子も亦た事相ならざるべからず
之れ即ち戒檀の大御本尊也
又作佛が今云ふ科学的本義
ならば種子題目も実物
にして此中に実力（科学力）
なかるべからず然れども現時は
理法を以てすもなく用無し
今正に事法の用あるのみ
幸ひ其種子の苗床の実在
する我国土こそ真に是れ
皆当作佛の本国土妙也
されど国諌によって種子を

心田に植へざれば真の平和作佛
の実果は顕れ難し　而も
国家諫暁の鑰は法主上人
御一人の御手に在り若し他に在りと
論ずる者あらば既に邪説魔
説なり猊下にして起たざれば
平和の掠奪者となるなり　其
科此罪無量なるべし
悪鬼入其身の御義口傳に曰く
鬼とは命を奪ふ者にして奮功
徳者と云ふことなり法華経に三
世諸佛の命根なり云々

猊下若し今の時国諫の慈悲
行を懈らば神妙の命を奪
ふ者也　萬が一にも法主上人
悪鬼入其身の魔王と化す事
莫れかし　若し如是事あ
らんとの罪科の弘法慈覚智
證等に超過すること百千萬億
倍なるべし現罰忽に至らむ
願くば我等に此の極悲をな
めしめ玉ふこと勿れ
御義口傳に云く
今日蓮等の類ひ南無妙法蓮華経を

猊下若し今の時国諫の慈悲
行を懈らば神妙の命を奪
ふ者也　萬が一にも法主上人
悪鬼入其身の魔王と化す事
莫れかし　若し如是事あ
らんとの罪科の弘法慈覚智
證等に超過すること百千萬億
倍なるべし現罰忽に至らむ
願くば我等に此の極悲をな
めしめ玉ふこと勿れ
御義口傳に云く
今日蓮等の類ひ南無妙法蓮華経を

惜む事は命根よりも惜き事
なり云々
神妙の命根は敵国の能く
断ち得る處に非ず　若し
猊下まして今国諌を怠らば
邦家の命根を断つ者なり
否命根以上に惜まるゝ
祖師の無上道を失ふものなり
一大逆殺行為と云ふ可し
穴怖し如何なる現罰や
此れに適せん
悪を滅するを功と云ひ善を生ず

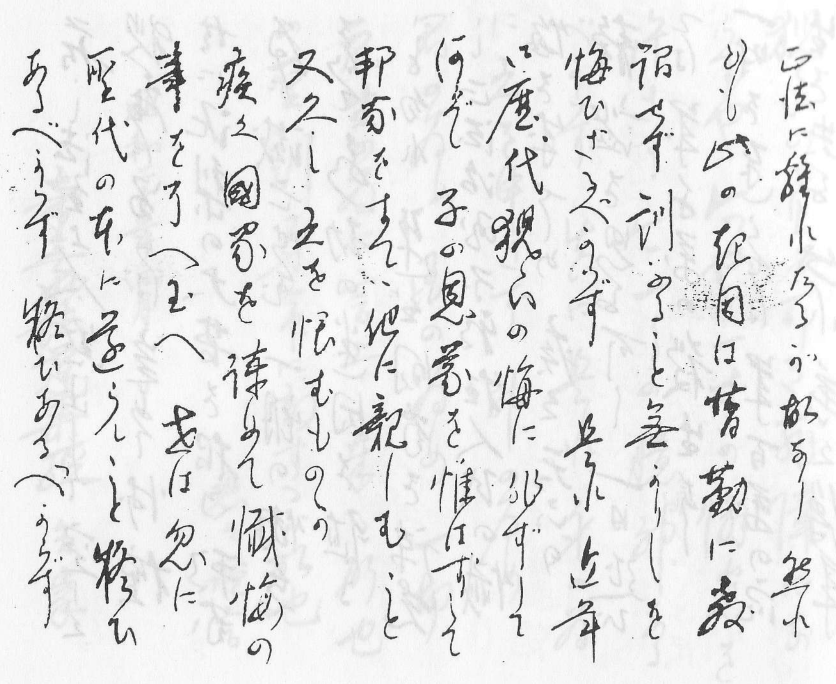
るを徳と云ふなり功徳とは即身成
佛なり

国諌して国を成仏せしむるに
過ぎたる功徳はあらじ　然らば
国家諌暁は即身成仏道なり
然らざるは堕地獄の業なり
唯に法主上人御一人の堕地獄の
ことに非ず神妙全体の堕地
獄なり而も其責猊下御一人
の怠慢と臆病とにありとせば罪萬劫に
も盡るべきものに非ず
我等大聖人を信奉して大忠をする神

妙の国民なり神恩一日も忘れ
難し何が申言せずして已
み得べき　伏して願はん
法主上人我等が苦衷を諒
し玉へと

文句の六に云く心懐悔恨とは
昔し勤に教詔せず訓ふること
無くして逃遊せしむることを致す
ことを悔ひ子の恩義を惟はずして
我を疎んじ他に親しむるを
恨むと

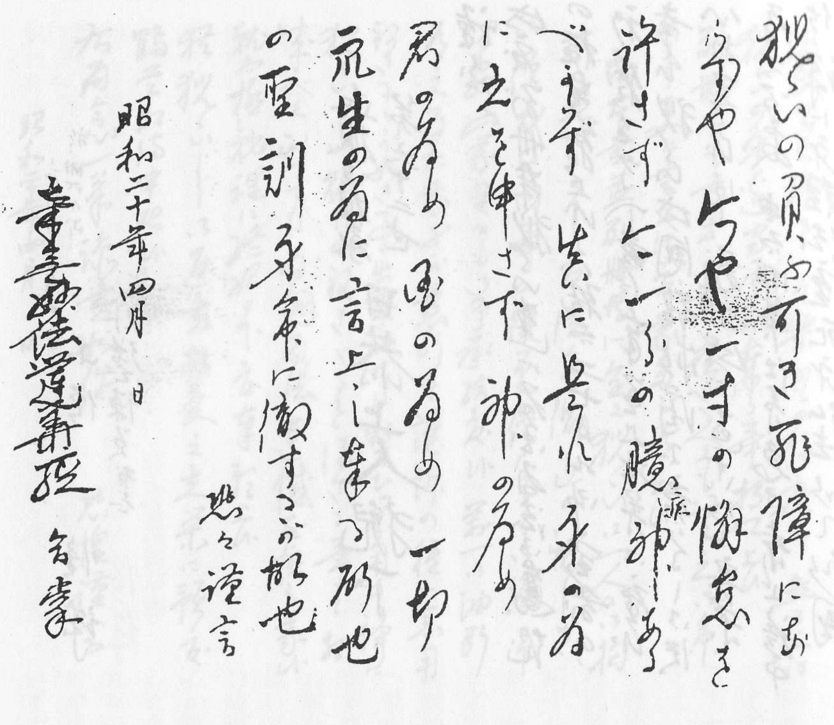
今邦家の民の受難は久しく



正法に離れたるが故なり　然れ
ども此の起因は昔勤に教
詔せず訓ふること無かりしを
悔ひざるべからず　是れ近年
御歴代猊下の悔に非ずして
何ぞ　子の恩義を惟はずして
邦家をすてて他に親しむこと
又久し之を恨むものか
疾く国家を諫めて懺悔の
事を了へ玉へ　世は忽に
聖代の本に還らんこと疑ひ
あるべからず　疑ひあるべからず

若し法主上人黙止して空しく
猊座に留らば定めて師檀
共に泥梨の大苦を招き邦家
為に滅亡せむ一期の懈怠
を以て永劫の迷因を殖る
こと勿れ速に国家を諌暁
し正法治国不邪柱人民の懺
悔を成せしめ疾々天下の
静謐を思ふ可し一日延び
ては幾千萬の殺生あり
一時を遅らせば幾百萬の衆
生を失ふ此れ悉く将来

若し法主上人黙止して空しく
猊座に留らば定めて師檀
共に泥梨の大苦を招き邦家
為に滅亡せむ一期の懈怠
を以て永劫の迷因を殖る
こと勿れ速に国家を諌暁
し正法治国不邪柱人民の懺
悔を成せしめ疾々天下の
静謐を思ふ可し一日延び
ては幾千萬の殺生あり
一時を遅らせば幾百萬の衆
生を失ふ此れ悉く将来



猊下の負ふ可き罪障にあ
らずや今や一寸の懈怠を
許さず今一分の臆病神ある
べからず真に是れ身の為
に之を申さず神の為め
君の為め国の為め一切
衆生の為に言上し奉る所也
の聖訓身命に徹するが故也

恐々謹言

昭和二十年四月　日

南無妙法蓮華経　合掌

市川市市川五ノ六二六
於明比氏宅

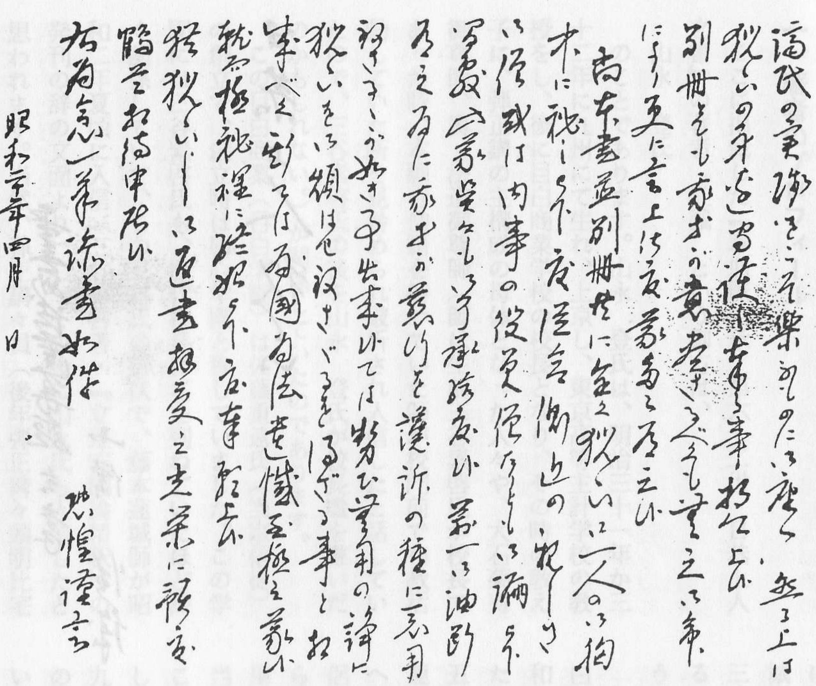
小僧　惟誠

外弾正講員有志

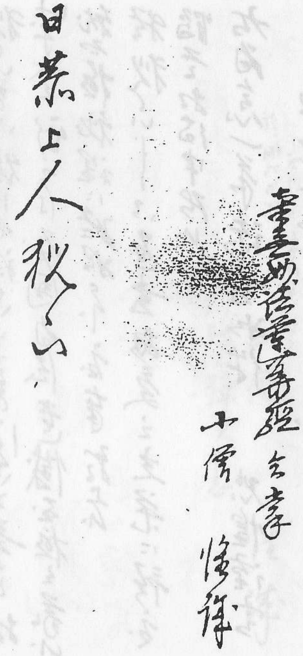
血脈相承
第六十二世　日恭上人猊下

謹白

此度別冊奉猊下速に為国為法御奮起の程奉願上候に就而二七日御宝前の祈願を了へ茲に奉呈上次第御座候幸ひ猊下此国難救済に当らるし御決心相定り候はば我等此に過ぎたる光栄有之間敷由而御命仕第急ぎ参上御給事仕り誠に身軽法重死身弘法以て救国



済民の実践をこそ楽ふものに御座候然る上は
猊下の身辺守護し奉る事誓上候
別冊とても我等が意盡さるべくも無之御命
により更に言上仕度義多々有之候
　尚本書並別冊共に全く猊下御一人の御胸
中に秘し被下度従令側近の親しき
御僧或は内事の役員僧たりとも御諭被下
間敷此義呉々も御了承給度候萬一御油断
有之為に我等が慈行を讒訴の種に悪用
致さるるが如き事出来候ては勢ひ無用の諍に
猊下を御煩はせ致さゞるを得ざる事と相
成べく斯ては為国為法遺憾至極之義候
就而極秘裡に終始被下度奉願上候
猶猊下より御返書拝受之光栄に預度
鶴首相待申居候
右為念一筆添書如件　恐惶謹言
昭和二十年四月　日



南無妙法蓮華経　合掌

小僧　惟誠

日恭上人猊下

南無妙法蓮華経　合掌

小僧　惟誠

日恭上人猊下